

令和8年度

第1回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和8年5月12日（火） 9:30～11:30

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会会長

瀬野博之（京都府丹後教育局長）

丹後「子育て」サポート協議会顧問

杉岡秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）

丹後「子育て」サポート協議会委員4名

野木俊宏（京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長）

櫛田 啓（社会福祉法人みねやま福祉会 理事長）

味田佳子（NPO法人エコネット丹後 理事・事務局長）

大井陽太（京都府立宮津天橋高等学校 教諭）

河邊花観（与謝野町高校魅力化コーディネーター）

各市町教育委員会担当者

事務局（丹後教育局）



4 趣旨説明 「令和8年度丹後『子育て』サポート協議会の方向性等について」

5 協議の概要 「丹後の『子育て』の考え方を継続して浸透させるために」

(1) 高校生意識調査アンケート

ア アンケートの波及について

- ・丹後地域独自でアンケートを実施しているが、今後、丹後地域の実態をより鮮明にするためにも、他の地域にも同様のアンケートが波及し、比較できるようになることが望ましい。
- ・各市町単位での意識調査ではなく、丹後地域の高校生という括りで広域の調査となるのは、本協議会独自のものである。

イ 高校生の意識

- ・進路指導の際、将来丹後に帰ってきたいという声は聞く。老後、子育て期、仕事をしながら週末だけ関わりたい等、どのような関わり方をしたいか興味がある。
- ・「丹後で住みたくない」や「働きたくない」、「好きなものがない」という意見が多い中、丹後での暮らしや生活に対する高校生の価値観が知りたい。
- ・記述から様々な意見を拾い集め整理することが今後の協議につながると考えると、理由を問うのは自由記述がいいと考える。また、高校生座談会でもどのような暮らしがしたいか詳しく聞いてみてはどうか。

ウ 若者の就職に対する意識の変化

- ・自分の住んでいる町以外は知らないので、一度外へ出てみたいという思いはあるように感じる。地元就職が多い傾向の職種でも、その仕事を都会でやりたいという高校生がいた。理想を追い求めている印象があり、都会へのあこがれは強い。
- ・大手企業のデータでは、年々、学生の地元就職の傾向が強まっているにも関わらず、丹後では、地元で就職する意識は低く、世間と逆行しているように感じる。
- ・丹後に仕事が無いというのは後付けの言い訳であり、実際には人手不足の状況がある。都会へのあこがれから一度は丹後を離れたが、子どもの頃の体験、思いが心に染み出し、丹後へ戻ってくる人は多いのではないかと感じる。

エ 丹後に対する大人のイメージ

- ・大人の自信のなさが子ども達に刷り込まれている可能性は否定できない。
- ・「丹後と言えば〇〇」という定番のイメージが、知らず知らずのうちに大人から子どもへ影響を与えている可能性がある。だからこそ、子どもたちの素直なアンケート回答によって、大人の固定観念を崩すことも期待できるのではないかと感じる。

オ アンケートの活用

- ・各協力校には、アンケート結果を学校運営協議会でも活用してもらい、教育活動の充実に向けてもう一步踏み込んだ議論の材料にしてもらいたい。

(2)丹後全体に「子育て」文化の醸成を目指すために

ア 大人の意識変容のための働きかけ

- ・親世代から甘やかさずに厳しく育ててほしいという声も聞く。自分たちが育った時代のやり方が正解だと感じる人はまだまだ多い。浸透には時間がかかると感じる。
- ・習い事などで、子どもに接することが多い指導者などに読んでもらい共感を得たい。子どもと対等になることや、子どもが主体的に考えることを徹底ができればよいと考える。
- ・メッセージの受け取り方は様々であるが、自分事となるものにしたい。

イ メッセージの良さや実践の手立て

- ・私自身がこの協議会に係わり、子育てメッセージに触れたからこそ、子どもと関わる時に、子どもの主体性を奪わず踏み止まれたときがあった。
- ・子育てメッセージを各市町教育委員会と協賛できないか。協賛となればイベントにも子育てのメッセージを波及させることもしやすくなる。連携することで、子育てメッセージの理念を基にイベント運営もしてもらえるのではないかと感じる。
- ・学校現場でも、このメッセージを提示したら大人に考えを変えてもらえる実感があった。ただ、実行していくと、迷いが生じる人がいる。だからこそ、近くに思いを受け止め、サポートしてあげられる人が必要だと感じた。

ウ 好事例の紹介

- ・ある子ども向けのイベントを親子そろっての実施としていたが、子どもが大人の顔色を伺いながら活動する姿があったので、子どもだけの参加に変更した。そうすると、子どもが主体的に活動する場面に遭遇し、この方法が子育てメッセージとつながったと感じた。

エ 方策

- ・字面だけで実践をお願いするのは難しいのではないか。この協議会メンバーが子育ての見本となって実践することが浸透への一歩ではないか。
- ・浸透と聞いて思い浮かぶのが、企業理念である。ただ理念があるだけでは忘れてしまうため、定期的に社員に日頃の実践を話してもらう機会を設け、管理職がその実践を理念と結び付けてフィードバックすることで、企業理念を理解し、浸透していくことにつながると考えられる。
- ・関心がある人が一堂に会して話をする機会があるといいのではないか。声がかかれば行くという人は少なからずいると思われる。

6 助言（杉岡顧問）

(1) 主体性について

- ・「夢見る小学校」というドキュメンタリー映画を見た。その学校では、プロジェクト授業中心に実践されており、そのプロジェクトを推進していく途中に子どもたちが教科教育の必要性を感じる仕掛けがなされていた。まさに子育てメッセージの浸透に向けて、そのような仕掛けが必要となる。今後はエピソードを集めて、広げていくことが重要。委員一人一人のエピソードも重要と感じる。
- ・メッセージを一言一句覚えるのは無理だが、心に留めて子どもと接することが大切である。
- ・学校でこれまでの枠組とは違った授業を展開するのもよい。そのためにもまずは、学校教育現場で働いている人々がメッセージを知り、考えを広げ、さらに親や子育て関係者、企業も巻き込んでいく必要がある。

(2) アンケートの結果から

- ・教育経済学を専門とされている中室牧子・慶應義塾大学教授が、生涯年収を上げるのは何か？を研究されている。その結果として、部活動での様々な経験、高校でのリーダー経験、非認知能力の育成の3つがあった。この3つについては、丹後では、祭りや非日常的な体験をとおして経験できるものである。丹後で育った思い出というのは大きなものであると感じる。ぜひ、この高校生アンケートの効果について、他地域に広げてもらいたい。

(3) 研修について

- ・府の京の高校生「海外探Q留学」応援事業では、高校生の視野が広がる仕組みづくりがなされており、府内各地から様々な高校生が集まる。参加生徒への面接は、支援企業の担当者が実施することもあり、企業側は、高校生のアイデアや興味・関心を求めている。丹後でもそのような人材は育つはずなので、地域間留学を実施して、都市部から丹後へ、丹後から都市部へというものを創設していくのもおもしろい。
- ・高校生アンケートに立ち返ると、丹後は好きだが住まない、働かない、という子が多いのは、高校生が丹後の企業を知らないからではないか。もっと丹後のカッコいい経営者と繋がる必要があるのではないか。
- ・税金だけでは無理なので、民間の金を使ってやる方がいい。今後、高校が企業と連携をしていくことも大切で、そうやっていくとアンケート結果が変わるのではないか。また、首長部局とつながることにより、企業とのつながりが強くなる部分はある。そういう連携の議論は今後必要だと感じる。